

健康福祉学科と体育学科の介護等に関する 意識調査と学生気質の考察

—— 過去6年間（1995年から2000年）の調査から ——

作 山 美智子

**Investigation of Students' Consciousness and Temperament towards Care in Health Welfare
Department and Physical Education Department**

Michiko Sakuyama

Sendai College consists of two departments; the one is Physical Education (PE) and the other is Health and Welfare Science (HWS). In order to study the students' intension for life style and nursing care, questionnaires were conducted in Sendai College, another college and a carrier school. As a result, female students of Sendai College are more concerned in nursing care than those in other college and a carrier school. The students of HWS have also been more interested in care than those in PE. Both the students of Sendai College and those of other college, and a carrier school expect living with their marriage couple. Irrespective of departments, the students of HWS have hoped to care their parents not with other member but by themselves.

Key words: nursing care, senescence, nursing home

I はじめに

平成12年4月に介護保険が導入され、また高齢化社会を迎えつつあるわが国では介護スタッフの養成が急務とされている。介護支援の中心となるスタッフは、介護福祉士であり、そのほとんどが専門学校で養成され、さらに3年間の介護施設での実務経験者にも国家試験受験資格が与えられるなど、その養成課程や免許取得方法はさまざまである。

平成7年4月、介護福祉士を大学教育で養成する学科として、日本で3番目に仙台大学は健康福祉学科を開設した。本学科では、より指導者的な介護福祉士の養成をめざして、介護ニーズの把握、介護計画の策定、実施およびその評価について介護実習を通して学習する教育を

ざしてきた。そして、すでに卒業生については1回生および2回生を社会に送り出した。

この度、本学科の当初の目的がどの程度達成されたかを検討するため、また、学生の教育もより充実したものとし社会的ニーズに答えるためにも、本学科介護福祉養成課程に入学してくる学生の入学動機、介護への関心度、学生気質などを解析して、大学教育の意義と養成の評価をすることが必要と考えた。

本研究は過去6年間（1995年から2000年）、本学健康福祉学科と体育学科、他大学および専門学校生を対象に介護への関心度、家族（親、将来の配偶者）の介護、学生時代のボランティア等について調査を行った。その結果、家族の介護は基本的には自分で行いたい（ヘルパーなども活用する）とする意向が健康福祉、体育の両

表1 各年度別標本数

| | 95年 | | 96年 | | 97年 | | 98年 | | 99年 | | 2000年 | | 合計 |
|-----------|-----|----|-----|----|-----|----|-----|----|-----|----|-------|----|------|
| | 男 | 女 | 男 | 女 | 男 | 女 | 男 | 女 | 男 | 女 | 男 | 女 | |
| 健康福祉学科(人) | 54 | 18 | 31 | 27 | 33 | 27 | 21 | 28 | 23 | 23 | 26 | 30 | 341人 |
| 体育学科(人) | 122 | 29 | 80 | 28 | 86 | 18 | 71 | 23 | 92 | 27 | 92 | 27 | 695人 |

学科学生に多いなど、学生の介護に対する意識について興味ある結果が得られたのでここに報告する。

II 研究方法

1. 仙台大学学生調査

調査期間 1995年5月から2000年5月

調査対象 その年の両学科の1年生とした。

回答があったのは健康福祉学科1年生 男子延べ人数188名,女子延べ人数153名,合計341名(回収率95年度98.4%,96年度98.3%,97年度100%,98年度90.7%,99年度92.6%,2000年度100%)と同様に体育学科1年生 男子述べ人数543名,女子述べ人数152名,合計695名(回収率95年度89.8%,96年度99.1%,97年度93.7%,98年度97.9%,99年度96.7%,2000年度90.8%)である。各年度の標本数は表1のとおりである。

調査方法 授業時間内において調査票に記入する方法とした。

調査内容 資料1参照

2. 他大学学生調査

調査期間 1999年11月

調査対象 A大学の建築学専攻コース学生2年生,男子59名,女子21名(回収率100%)とB専門学校看護コース学生2年生,女子48名(回収率99%)

調査方法 授業時間内において調査票に記入する方法とした。

調査内容 資料2参照

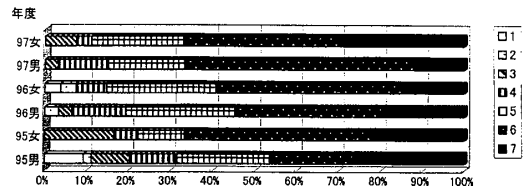


図1-1 介護関心(健康福祉,95,96,97年)

1. 全くない
2. ない
3. あまりない
4. どちらとも言えない
5. 少しある
6. ある
7. 大いにある

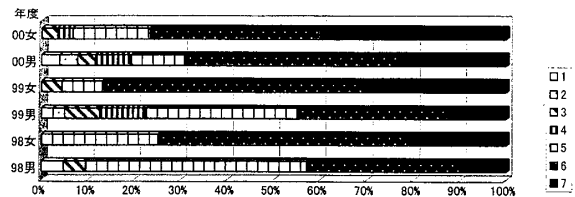


図1-2 介護関心(健康福祉,98,99,2000)

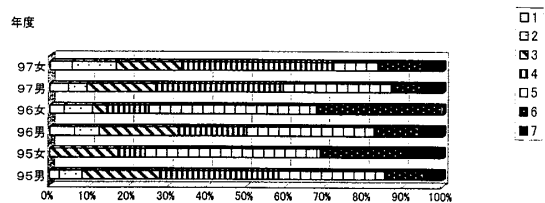


図1-3 介護関心(体育,95,96,97年度)

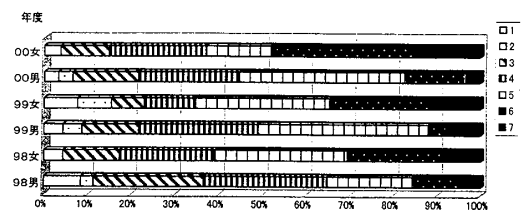


図1-4 介護関心(体育,98,99,2000年度)

III 結 果

介護関心について

健康福祉学科学生（以下「健福」と略す）の1995年度生（以下「95年生」と略す）では図1-1、図1-2に示すように介護に対する関心は「全くない」、「ない」、「あまりない」と回答した男子が2割で過去6年間では最も多かった。「大いにある」「ある」「少しある」と回答した学生は全体では男子より女子が多く、特に女子では98年生100%、99年生96%、そして2000年生は93%で最も低かった96年生より8ポイント高くなっている。2000年男子は81%で最も低い95年生より12ポイント高くなっていた。

一方、体育学科学生（以下「体育」と略す）でも図1-3、図1-4に示すように男子より女子の方が関心度は毎年高い傾向にあった。また、男子では教職課程の介護等体験が始まる99年生は「大いにある」「少しある」「ある」が51%で、最も低い95年生より9ポイント高くなっている。女子の関心度は同様に関心ありが99年生は66%で、最も低い97年生より38ポイント高くなっている。

将来の老後の家族構成に対する回答では、図2-1～4のように過去6年間、両学科学生ともに「夫婦のみ」の家族構成を希望するが一番多く40%から60%だった。ついで「夫婦と子供夫婦」の家族構成を希望する学生は20%から30%の回答だった。「親、子供夫婦、夫婦」の三世同居を希望する学生は共に10%弱から30%だった。また「結婚しないでひとりであろう」という回答も各学年においてみられ、「その他」として集計した。明らかな独身希望者は各学年とも数名でほぼ一定だった。

図3の1～4のように家族（親、将来の配偶者）の介護を担う者に対する回答では、調査期間中に介護保険法が導入され、図3の1～4をみると99年以前と2000年とで回答者の意識が違ってきたことが示された。介護を「自分で」という回答は99年生までは全く自分の力で介護

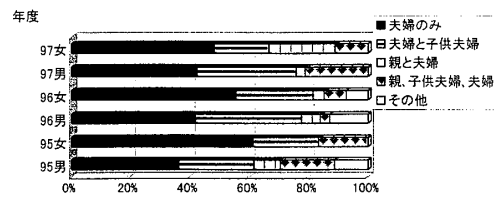


図2-1 老後の家族構成（健康福祉，95，96，97）

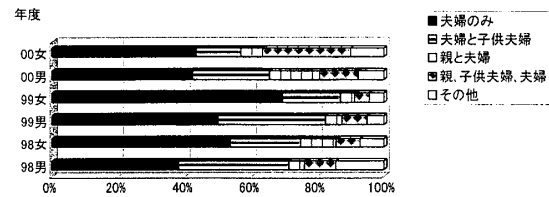


図2-2 老後の家族構成（健康福祉，98，99，2000）

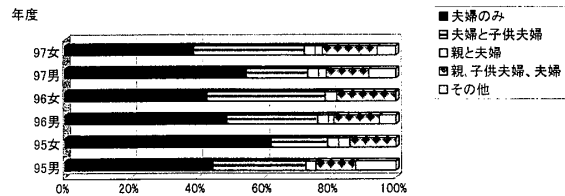


図2-3 老後の家族構成（体育，95，96，97）

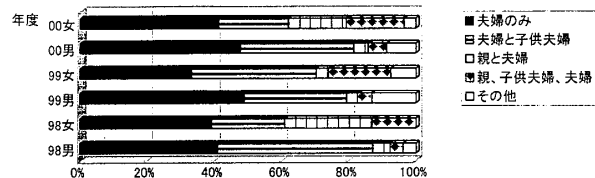


図2-4 老後の家族構成（体育，98，99，2000）

に取り組み、ヘルパー、看護婦の介助と、公的や民間を共に必要としないとする回答が多かった。2000年の学生は公的援助を一部含めながらも主体は自分でやるとする「自分で」の回答が多くなっていた。6年間を通して男子より女子のほうが両学科ともに「自分でやる」の回答者が多く、外部（民間ヘルパー等）の利用も併用するという回答であった。「外注等」は2000年生に関して体育学生では男女ともに過去最高の30%から40%になっている。健福学生では95年生で「施設等」を利用すると回答したものが男子30%、女子20%弱で、その後減少の傾向が

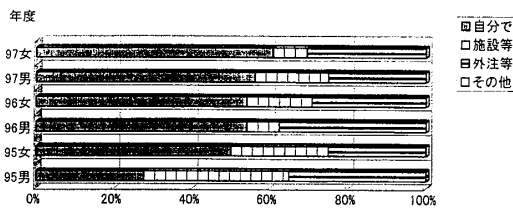


図 3-1 親, 配偶者の介護 (健康福祉, 95, 96, 97 年度)

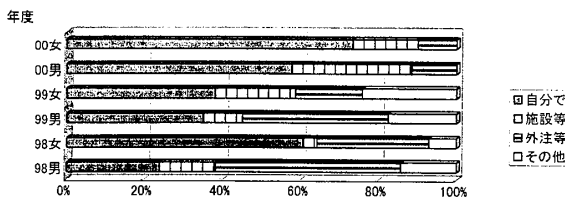


図 3-2 親, 配偶者の介護 (健康福祉, 98, 99, 2000 年度)

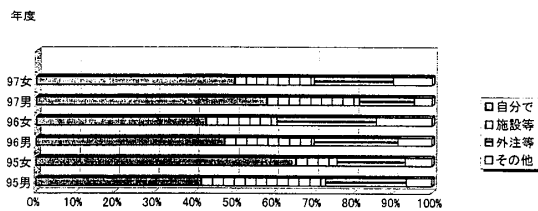


図 3-3 親, 配偶者の介護 (体育, 95, 96, 97 年度)

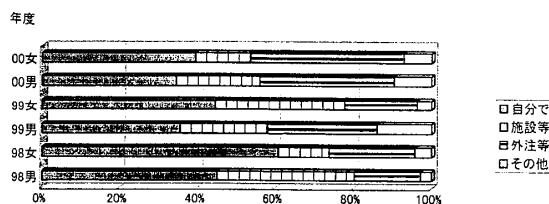


図 3-4 親, 配偶者の介護 (体育, 98, 99, 2000 年度)

みられたが 2000 年には男子 30%, 女子 20% であった。「自分で行う」とする比率は健福 98 年生女子 61%, 健福 2000 年生女子 73%, 体育 95 年生女子 66%, 体育 98 年生女子 60% が高くなっていた。

ボランティアを学生時代に体験希望する「体験希望」あるいは「支障なければ」(授業, 部活等に支障がなければ体験したい) 学生は図 4-1 ~4 から, 健福学生・体育学生の希望者は 50% 以上をこえていた。また, 女子の方が男子より

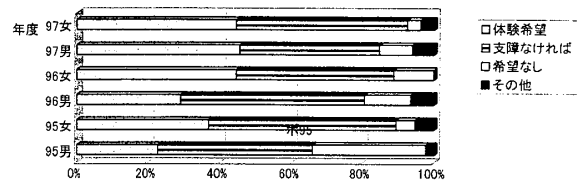


図 4-1 ボランティア体験希望 (健康福祉, 95, 96, 97)

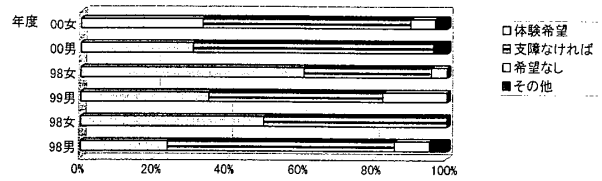


図 4-2 ボランティア体験希望 (健康福祉, 98, 99, 2000)

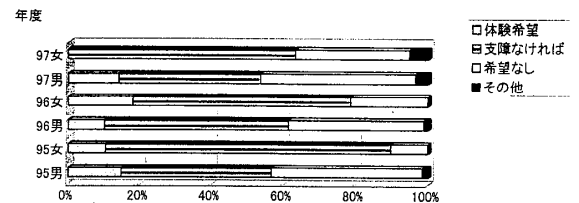


図 4-3 ボランティア体験希望 (体育, 95, 96, 97)

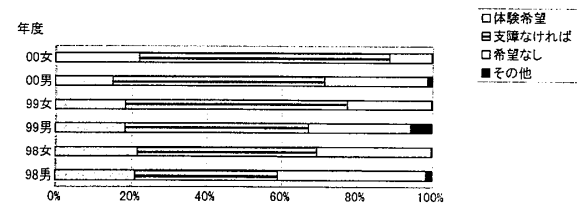


図 4-4 ボランティア体験希望 (体育, 98, 99, 2000)

希望者の割合が各年度とも多くなっていた。特に 98 年生健福女子ではボランティア希望は 100% であった。2000 年生において体育男女ともに「体験希望」「支障なければ」を含めた希望者が過去最高で, 男子 70%, 女子 80% をしめていた。健福女子はどの年度もボランティア体験希望者は 80% をこえていた。

IV 考 察

高齢化社会にあつては, 高齢者の QOL の向上や寝たきり高齢者の減少を目的に身体能力を

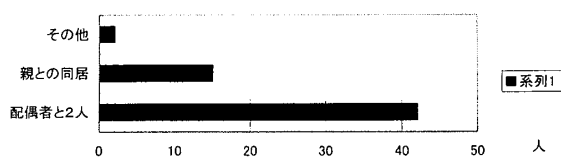


図 5-1 将来の家族構成 A 大学 (男 n=59)

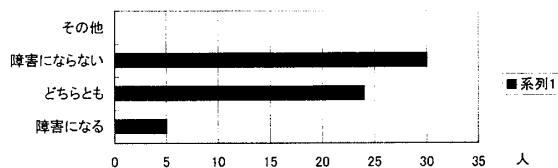


図 6-1 人生設計において結婚は障害になるか A 大学 (男 n=59)

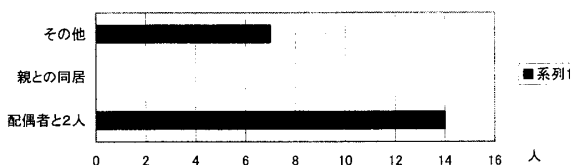


図 5-2 将来の家族構成 A 大学 (女 n=21)

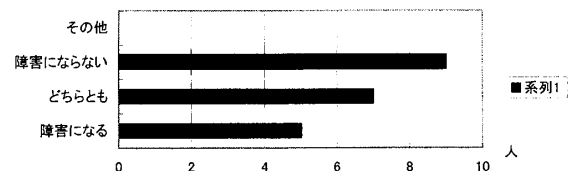


図 6-2 人生設計において結婚は障害になるか A 大学 (女 n=21)

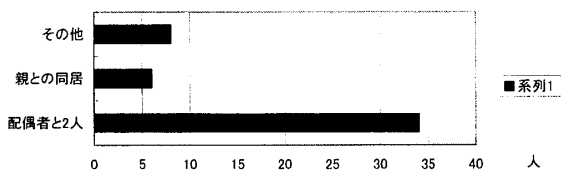


図 5-3 将来の家族構成 B 専門学校 (女 n=48)

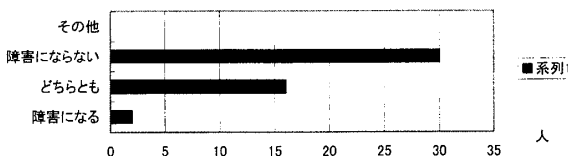


図 6-3 人生設計において結婚は障害になるか B 専門学校 (女 n=48)

可能なかぎり、増強、保持させる介護が必要である。身体運動と運動能力の向上を教育と研究の両面から追及が可能となる体育学部において、介護福祉士養成課程を設置した意義は大きい。

仙台大学の健康福祉学科と体育学科の介護関心度の大きな変化として1997年、1998年頃から高くなっていった。これは介護保険の導入前の国民的介護関心の高まりの影響を受けていると考えられる。さらに体育学科の教職課程で介護等体験がおこなわれた1999年から、男子学生の介護関心は高くなっていった。女子は、健康福祉学科が開設された年とその一年後には介護関心ありの学生は70%をこえており、健康福祉学科の開設が強く影響していると考えられる。さらに介護等体験が開始される前の1998年より、介護関心のある学生は60%をこえていた。

仙台大学生の将来の老後の家族構成についての希望では、大学入学間もない一年生は圧倒的に「夫婦のみ」の家族を希望している。これは他大学生、専門学校生(図5-1~3)ともに同じ

で60%から70%をしめ、他大学女子は親との同居に希望は「なし」でほぼ100%であった。また、「結婚はあなたの人生設計において障害となるか」の問いに図6の1から3より「はい」はA大学男子9%、A大学女子24%、B専門学校女子2%、「いいえ」はA大学男子51%、A大学女子43%、B専門学校女子63%だった。純粋に夫婦のみの関係で生活を継続したい、老後になっても自分より年老いた親たちの老後を見ることへの抵抗、また自分の子供にまで面倒をかけたくないという意識とも考えられる。大きな家族で住みたい、という希望があったとしても、それを支えるためには、それぞれの生活歴を最大に尊重し、住環境の調整、経済の調整、人間関係の調整など達成しなければならない課題は多いためであると考えられる。

厚生統計協会による世帯統計「要介護者の年齢階級別にみた主たる介護者の続柄別要介護者数及び構成割合(H10年度)」では同居をしてい

る場合、主たる介護者が配偶者だとするものは32%と最も多く、次いで子の配偶者29%、子23%となっている。

家族（親、将来の配偶者）の介護を担うものでは、仙台大学生は「自分で」行うとするものが多く、自分自身の老いが現実には迫っていないことも施設（老健施設、特別養護老人ホーム）の利用が選択肢の下位に位置していると考えられ

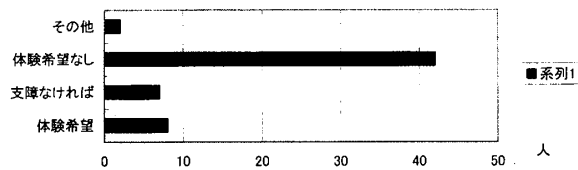


図7-1 ボランティア体験希望 A 大学 (男 n=59)

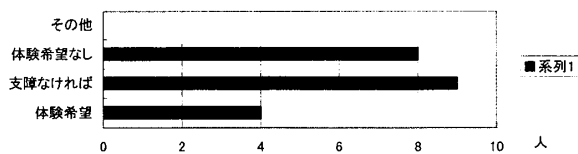


図7-2 ボランティア体験希望 A 大学 (女 n=21)

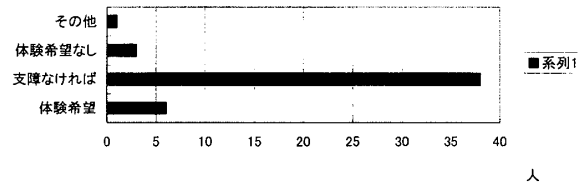


図7-3 ボランティア体験希望 B 専門学校 (女 n=48)

る。さらに自分の手で介護をしたい、他者には任せておけないという若者の家族への思いもうかがわれた。

また、ボランティア体験希望では、A 大学男子の「体験希望」「支障なければ」を含めた希望者は25%、A 大学女子のそれは62%、B 専門学校女子92%だった。「希望せず」はA 大学男子71%と高かった。健康福祉学生は介護の専門教育と直結、関連するため体育学生や他大学生よりボランティアに対して前向きに考えていることがうかがわれた。

V 結 語

今回の調査から、学生の介護に関する意識は次のようであった。

1. 仙台大学生の介護関心は男子より女子の方が高い。学科では健康福祉学生の方が高い。
2. 介護等体験の開始と介護保険の開始は学生たちの介護関心を高くしている。
3. 健福、体育、他大学生ともに将来の老後の生活構成は夫婦のみを希望している。
4. 健福、体育学生は家族（親、配偶者）の介護は基本的には自分でやりたい。
5. ボランティアは他大学生より仙台大学生は体験希望者が多く、健福学生は特に体験を希望する学生が多い。

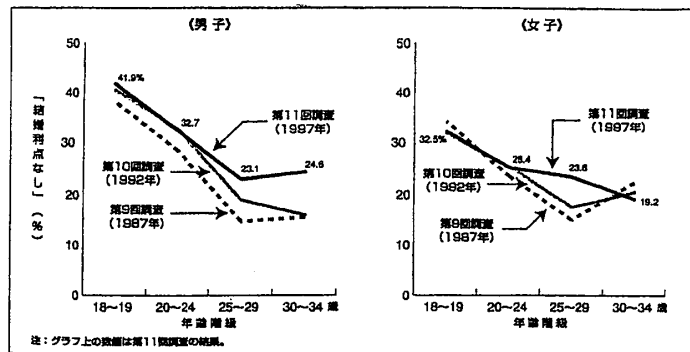


図8 年齢別にみた今の自分にとって「結婚することは利点がない」と考える未婚者
 国立社会保障・人口問題研究所 編集
 一第11回出生動向基本調査一より引用

謝 辞

本調査を進めるにあたり、体育学科の松井匡治教授、佐藤捷教授、東北工業大学建築学科 沼野夏生教授、仙台市立看護専門学校 副校長 藤原朋子先生にご協力いただいた。また、無江季次教授に御校閲いただいた。ここに深く感謝申しあげる。

引用参考文献

- 1) 鈴木正幸：現代における感性の意義，感性教育，現代のエスプリ，至文堂，pp 53-65, 1997.
- 2) 高橋史朗：感性は自己実現活動の中核，感性教育，現代のエスプリ，至文堂，pp 100-112, 1997.
- 3) 芳村思風：感性の哲学的思考，感性教育，現代のエスプリ，至文堂，pp 44-52, 1997.
- 4) 高橋史朗：臨床教育学と感性教育学，玉川大学出版，1998.
- 5) 吉田敦彦：ホリスティック教育論，日本表論社，1999.
- 6) 江原由美子：ジェンダーの社会学，放送大学教育振興会，1999.
- 7) 国立社会保障・人口問題研究所：第11回出生動向基本調査，独身青年層の結婚観と子ども観，1997.
- 8) 厚生省人口問題研究所：第1回全国家庭動向調査，現代日本の家族に関する意識と実態，1993.
- 9) 厚生統計協会：国民生活基礎調査，世帯統計の歩み，1999.

(平成12年6月23日受付，平成12年7月27日受理)

